

公開保育 評価（のだのこども園）

【公開保育実施日】

2024（令和6）年 1 月 30 日（火）10：00～11：00

【評価者】 田中 卓也（育英大学）

【参加者】 滝口 優先生（学校法人第二加藤学園 のだのこども園 副園長）

【内容】0 歳児から 5 歳児までの保育を観察し、「保育内容」、「保育環境」、「園児の様子」、「保育者の姿勢」について評価するものである。「のだのこども園」は開園して約4年を迎えることになった。これまでに改善・成長した点や改善点などを評価するものである。

【評価の観点について】

「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」をはじめ、「幼児期にふさわしい生活の展開」、「遊びを通しての総合的な保育」、「ひとりひとりの発達特性に応じた指導」、「主体的に活動できるような環境構成」、「指導計画」等について総合的に評価する。

////////////////////////////////////

【評価】（のだのこども園）

（0 歳児）

☆特に評価できる点

- ・一日の流れに基づいて、安定的に運営できている。
- ・遊びスペースも十分確保できている。（室内と屋外をつなぐテラス部分の環境構成について、子どもの成長に合わせたものになっている）

★改善が望まれる点

- ・1 歳児スペースとの連動、担当者間のこまかな連携

（1 歳児）

☆特に評価できる点

- ・生活スペースと遊びスペースのレイアウト、広さ、子どもの成長にあわせた環境構成ができています。

★改善が望まれる点

- ・2 歳児との連動、担当者間の連携
- ・遊びにかかわる素材のさらなる精査／検討

（2 歳児）

☆特に評価できる点

- ・保育室のスペースが他の年齢と比較しやや狭いイメージだが、生活スペースと遊びスペースのレイアウト、子どもの成長にあわせた環境構成ができています。
- ・保護者との連携

★改善が望まれる点

- ・子どもの活動範囲の広まりの把握
- ・1歳児および2,3歳児との連動、連携
- ・テラスの活用方法の検討

(3歳児)

☆特に評価できる点

- ・主体性を持った遊びへの誘導
- ・3歳児の発話の可能性とその機会
- ・環境構成の活動
- ・保護者との連携

★改善が望まれる点

- ・保育者間のこまかな連携

(4歳児)

☆特に評価できる点

- ・保育士の園児への発達段階の理解
- ・保育室の環境構成の多様性
- ・保護者との連携

★改善が望まれる点

- ・遊びの経験の幅を広げる

(5歳児)

☆特に評価できる点

- ・子どもが主体的に遊びに取り組んでいる。
- ・生活の連続性、経験の連続性がなりえている。
- ・素材活用の豊かさ
- ・協同的な遊び、活動への意欲につながっている。
- ・保護者との連携

★改善が望まれる点

- ・テラスの活用方法の具体例
- ・インクルーシブな保育のあり方

<第三者評価者>

2024年2月28日

育英大学 田中 卓也

【所見】

園内視察を行い、以下に若干の所見について述べてみたい。視察を行い、滝口副園長先生の説明を受けながら園内を視察させていただくなかで、昨年課題に挙がっていたことへの改善努力が見られたことは大きい。上記にあるように「開園から3年は、徐々に在園児数・学齢が増えてきた。(初年度は3歳まで在籍し、2022年に初めての卒園生が卒園) 徐々に増えていく園児とともに、職員や子ども達の意識を緩やかに変容させながら、各年齢の生活の流れや生活環境を整えてきた背景がある」というように、園児の増加に関係なく、園児の主体性を重んじ、こども園職員の意識形成、情報共有のみならず、緩やかに変容させるところに一つの特徴を感じるようになった。このことは個々の保育者のみでは決して叶うことはできず、職員が同じめざす目標の共有、意識形成が不可欠にほかならない。

また「開園初期は、こどもたちが園舎をどう活用していくかを観察しながら一日の流れや環境構成を徐々に形づくってき」やことについても、その目標に近づける努力が見て取れる。

園長先生をはじめ、滝口副園長先生、そのほか保育教諭の方々にいたるまで、徐々にではあるが、浸透している様子がうかがえた。何にも増して環境が整備されてきているところは目を引くものであった。やや園児増加に伴い園内に保育室のスペースがやや狭いイメージも持ったが、今後のこども園の展開に期待されるところである。

「今後は『こども主体の保育』をさらに深めていくにあたって、(中略) 職員同士の連携や、年齢の縦関係の連続性への理解や手立ての時間を増やしていきたい」という点についても、滝口副園長先生をはじめ、各クラスの先生方にもその意識があることが散見された。

開園4年目を迎える貴園の保育活動、保護者とのより強い関係性の構築、地域に基づいたこども園など、今後のより一層の取り組みおよび展開にさらなる期待をするところである。

【評価を受けての園としての自己評価(改善策など)】

開園から3年は、徐々に在園児数・学齢が増えてきた。(初年度は3歳まで在籍し、2022年に初めての卒園生が卒園) 徐々に増えていく園児とともに、職員や子ども達の意識を緩やかに変容させながら、各年齢ごとの生活の流れや生活環境を整えてきた背景がある。特に、時代の変化に伴う保育所保育指針に明記されている、養うべき資質・能力を捉え直し、旧来の年齢ごとの設定保育(日々やることを大人が設定し、子どもたちがそれをなぞる生活)から、個々の特性や生活環境にあわせた子ども達ひとりひとりが心地よいと感じられる生活リズムと、遊びのなかで想いを発露できる子ども主体の園生活の実現を目標にしてきた。

開園初期は、こどもたちが園舎をどう活用していくかを観察しながら一日の流れや環境構成を徐々に形づくってきており、評価者の田中先生にもその点について評価をいただいた。今後は「こども主体の保育」をさらに深めていくにあたって、課題と指摘いただいた職員同士の連携や、年齢の縦関係の連続性への理解や手立ての時間を増やしていきたい。

そのために、2023年度は、あらためて保育者の業務量の調整、行事の見直し、人員の拡充などを行うことで、保育者間の連携や担任の保育準備に充てることのできる余白を産み出していく予定である。その点については、3月に保護者の方に「対話の会」を開き変更点などについて、ご理解ご協力をいただき進めているところである。

また、子どもたちが自在感をもって生活しつつ保育者が安心して見守ることのできる空間にすべく、生活スペース（ゾーニング）の見直しや安全対策（ゲートの設置による死角の防止）を2023年度に実施しているところである。

2023年は、こども主体の保育の土台となる、安心安全、保護者の方との連携をベースとし、職員間での連携を深めることで、保育の質の向上を目指していくことを計画している。